

メッセージ：私たちの天の父なる神様の愛の御手の中の安心

OIC の皆様おはようございます。
ようこそ天の父なる神の家へ来られました。
また、本日は父の日です。父の日おめでとうございます。

今日、私は、神様が本当に私たちの天の父であられること、あるいは本当に私たちの天の父であり得るという、聖書からの素晴らしいのちの言葉を、私たち全員が聞くように祈っています。私は前回のメッセージは次のように締めくくりました。

私は、『The Hymnal for Worship & Celebration (礼拝と祝典のための讃美歌)』に収録されている讃美歌の第 3 番で締めくくります。これは長年 OIC の讃美です。曲は 484 番「Who Is on the Lord's Side? (誰が主の味方ですか?)」

第 3 番

Jesus, Thou hast bought us, Not with gold or gem,
(イエスよ、あなたは金でも宝石でもなく、私たちを買ってくださいました)

But with Thine own lifeblood, For Thy diadem.
(しかし、あなた自身の血潮で、あなたの王権のために。

With Thy blessing filling each who comes to Thee,
(あなたのもとに来るそれぞれの者をあなたの祝福で満たしながら)

Thou hast made us willing,
(あなたは私たちを喜んで仕える者にしてくださっている)

Thou hast made us free.
(あなたは私たちを自由にしてくださっている。)

By Thy grand redemption,
(あなたの壮大な罪のあがないによって)

By Thy grace divine,
(神様の恵みによって)

We are on the Lord's side, Savior,
(私たちは、救い主であられる、主の味方です)

we are Thine.
(私たちはあなたのものです)

イエス様を信じて新しく生まれ変わったクリスチャンは主イエス様の味方です。主イエス様はご自身の血潮で私たちを買い取ってくださいました。イエス様は、イエス様に仕えようとする新しい心を私たちに与えてくださっています。私たちはイエス様の側にいるので、イエス様の父の御手の中にもいます。私の好きな種まきの聖書の一節<ペテロの手紙 I 3 章 18 節>は言っています。

＜ペテロの手紙Ⅰ 3章18節＞

キリストも苦しみました。罪を犯したことの無い方であつたにもかかわらず、私たち罪人のために死なれたのです。それは、肉においては死んでも、霊においては生かされて、私たちを神のもとに導くためでした。

18節に： 私たちを神のもとに導くためとはイエスを信じるすべての人にとってという意味です。 イエスは私たちを、私たちの父なる神様の愛の御手の中で安心して過ごせるようにしてくださっています。

今日は、ヨハネによる福音書第10章から、イエスが神様の御子であられるという断言に関するいくつかの意味を解釈し、焦点を当てます。 これは、このメッセージで天の父なる神様を強調することです。 ヨハネによる福音書第10章の大部分は、イエスは偉大な羊飼いであり、その羊はクリスチャンであるというイエスの教えをテーマにしています。 多くのユダヤ人を怒らせた明らかなつながりは、イエスが神様の子だと断言したことでした。 イエスは神様が父であられると言っているのです。 ユダヤ人は、唯一の神様はアブラハム、イサク、ヤコブの神様であられると断言し、信じて明言していました。 それは真実です。 しかし、ユダヤ人はアブラハムからの自然な血統の流れによって、神様が自分たちの父であると思い込んでいました。 イエスは、神様を信じて明言することと、律法だけでなく霊的にも神様に従うこと、この2つは違うものだと言われるでしょう！ イエスは＜ヨハネの福音書10章・36節＞で次のように言われ、この対決の大部分をここから始められています。

＜ヨハネの福音書10章・36節＞

『わたしは神の子だ』

**善き羊飼いとその羊たち：天の父なる神様と御子は同じ良き羊飼いで、その羊たちをケアする
－ 父親は自分を犠牲にしてでも子供を守る**

天の父なる神様のご性質を示すために、私たちは良い羊飼いとその羊としてイエス様ご自身の比喩または類似点を用いてイエスを簡単に見てみましょう。 ＜ヨハネの福音書10章11節-16節＞でイエスは言いました。

＜ヨハネの福音書10章11節-13節＞

11 わたしはまた、良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のためにはいのちも捨てます。

12 雇い人は、狼が来れば羊を捨てて、すぐに逃げ出します。彼らは羊の持ち主でも、羊飼いでないからです。こうして狼は羊にとびかかり、群れを追い散らしてしまいます。

13 雇い人はお金で雇われているだけで、羊のことをほんとうに心にかけているわけではないので、平気で逃げってしまうのです。

私たちはこれらの聖書の箇所、雇い人が金銭的な利益のためだけに羊の世話をしていることがわかります。 それは心からの仕事ではありません！ オオカミはいつも羊を食べようとしています。 オオカミは羊の世話をする者たちを攻撃します。 そのため犠牲的な奉仕と愛が必要です！ オオカミの比喩は、偽の宗教教師と、彼らを鼓舞する悪魔や悪霊が含まれます。 イエスは、雇い人とは異なり、良い羊飼いであられるご自身が羊のために命を犠牲にすることを明確にしておられます。 ここでイエスは、イエスの羊であるクリスチャンへの父なる神様の配慮を明らかにしておられます。 父として息子のようにです。 ＜ヨハネの福音書1章18節＞を私たちはみましょう。

＜ヨハネの福音書1章18節＞

いまだかつて、実際に神を見た人はいません。しかし、神のひとり子だけは別です。御子は父なる神といつもいっしょですから、神について知っていることを教えてくださいました。

＜ヨハネの福音書 14 章 7 節-9 節＞で、イエス様は使徒ピリポに実際にこの事実を話されました。

＜ヨハネの福音書 14 章 7 節-9 節＞

7 わたしがどういう者か知っているなら、わたしの父のこともわかったはずです。あなたがたは、今からはもう父を知っているし、すでに父を見ているのです。」

8 今度はピリポが口をはさみました。「先生。あなたのお父様を見せてください。それだけで十分ですから。」

9 「ピリポ。こんなに長くいっしょにいるのに、わたしがどういう者かまだわからないのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。それなのにどうして父を見せてくださいなどと言うのですか。」

クリスチャンと三位一体であられる神様との関係

聖書は、神様が三位一体であられることを明らかにしています。 天の父なる神様-御子イエス様-聖霊なる神様です。 クリスチャンは聖書の中で、イエス様に集中するよう教示されています。

＜ヘブル人への手紙 12 章 1 節-2 節＞

1 このように、数えきれないほどの多くの証人たちが、競技場の観覧席で私たちを見つめています。だから、うしろへ引き戻そうとする力や、まとわりつく罪をふり捨てて、神の用意された競走を忍耐をもって走り抜こうではありませんか。

2 あなたがたの信仰の指導者であり教師であるイエスから、目を離さないようにしなさい。イエスは後にある喜びを知って、恥辱をものともせず十字架にかかられました。そして今は、神の王座の右に座しておられるのです。

天の父なる神様や聖霊なる神様との私たちの関係は、私たちがイエス様に焦点を合わせるので妨げられることはありません！ 私は Charles Spurgeon のディボーション、『モーニング&イブニング』からの引用が好きです。「私たちは、三位一体における位格の区別はあっても、名誉の区別はないことを忘れがちです。」 私たちはあまりにも頻繁に、私たちの救いの栄誉を、少なくともその博愛の深さを、天の父なる神様よりもイエス・キリストに帰しています。これは非常に大きな間違いです。もしイエス様が来られたのなら？ イエス様の天の父なる神様はイエス様を遣わされなかったのでしょうか？ もしイエス様が不思議なことを話したとすれば、イエス様の父なる神様は、イエス様が新しい契約の働き人となれるように、イエス様の唇に恵みを注いだのではないのでしょうか？ 天の父なる神様と御子イエス様と聖霊なる神様を正しく知っている者は、その愛において、天の父なる神様と御子イエス様と聖霊なる神様それぞれを区別することは決してありません。

私はまた、「三位一体の神様に比較することはない」という真理も付け加えます！

御子の犠牲を通して示された天の父なる神様の憐れみ

多くのクリスチャンは自身の父親との関係が不十分だったし、今も不十分です。もしかしたら自身の父親は虐待者だったかもしれません。この自身の父親との不十分な関係は、完璧な天の父なる神様に間違った態度をしばしば生み出します。Spurgeon もまた、先ほど引用したディボーションの冒頭で次のように語っています。「イエス・キリストが、天の父なる神様の許可、権威、承諾、支援があったので、私たちを救うために天から来られた」ということは、すてきな考えです。この引用は、＜ヨハネの手紙 I 4 章 14 節＞に焦点を当てたものです：

＜ヨハネの手紙 I 4 章 14 節＞

さらに私たちは、神がひとり子を世の救い主として遣わされたのをこの目で見、それを、いま全世界に伝えています。

イエス様に与えられた天の父なる神様の許可は、永遠の過去における神様の計画に見られます。天の父なる神様は天地創造の前にイエス様を遣わすことを計画されました。

＜エペソ人への手紙 1 章 4 節＞

神はこの世界をお造りになる前から、私たちを、ご自分のものとして選んでくださいました。そして、神は私たちを、ご自分の目から見て、何一つ欠点のない、きよい者にしようとお定めになりました。

私たちはこの天の父なる神様の許可、権威、承諾、支援は、イエス様によって成された奇跡にも見ます。 <ヨハネの福音書 10 章 25 節>で、イエス様に反対するユダヤ人たちにイエス様が言われたとおりです。

<ヨハネの福音書 10 章 25 節>

彼らの質問に、イエスはお答えになりました。「そのことならもう話しました。あなたがたは信じませんでした。わたしは、父の御名によって何度も奇跡を行ったでしょう。証拠はそれで十分なはずですよ。

これらの 1 世紀のユダヤ人、偽キリスト教徒、エホバの証人のような異端は、イエス様が常に天の父なる神様に御子としての関係を保っていたとことをゆがんで伝えています。 イエス様は神様と等しいです。 <ピリピ人への手紙 2 章 6 節>で聖書は私たちに教えています。

<ピリピ人への手紙 2 章 6 節>

キリストは神であられるのに、神としての権利を要求したり、それに執着したりはなさいませんでした。

しかし罪深い人間とは異なり、イエス様は神様ご自身でありながら、常に天の父なる神様に服従していることがおできになりました。 本当におよび真実に、神様の恵みや一方的な神様の好意により、クリスチャンは、イエス様が天の父なる神様へされたのと同じように、神様に従う生き方をするように召されています。 クリスチャンの罪深い性質は神様に従う生き方を妨げるかもしれませんが、成熟するにつれて、神様に従う生き方は毎日の生活の喜びの一部となります。成熟しているクリスチャンは、神様がクリスチャンになるだろうと予見したアイデンティティを悟ります。 また愛に満ちている天の父なる神様に従って、より明確になり、確固たるものになります。 神様は三位一体のお方なので、イエス様や聖霊なる神様に従うことも含まれることに注意してください。 黙想すべきもう一つの真理は、イエス様が十字架上で血を流されたことを思い出すとき、天の父なる神様が私たちのためにイエス様をそこに置かれたということです。天の父なる神様はイエス様を遣わされました！

<ヨハネの福音書 12 章 49 節>でもう一度言われています。

<ヨハネの福音書 12 章 49 節>

その真理はわたしが考え出したことではなく、父が語れとお命じになったことです。

イエス様はロボットではありませんでした。 しかし、天の父なる神様を愛し、天の父なる神様のみこころを行うこと、十字架上の死さえも、すべてを献げられた御子でした。 私たちは神様との関係の中で、この真理を黙想することがよいでしょう。 私たちの献身は、天の父なる神様につながるイエス様の主権にあります。 使徒パウロは<コリント人への手紙 I 8 章 6 節>でこう書きました。

<コリント人への手紙 I 8 章 6 節>

しかし私たちは、父なる神ただおひとりであることを知っているのです。この神様が万物を創造し、人間をご自分のものとして造られたのです。また私たちは、ただ一人の主、イエス・キリストがおられることを知っています。この方がすべてのものを造り、私たちにいのちを与えてくださるのです。

私たちの献身は、天の父なる神様につながるイエス様の主権にあります。

天の父なる神様の守り

＜ヨハネの福音書 10 章 27 節-30 節＞を読みます。

＜ヨハネの福音書 10 章 27 節-30 節＞

27 わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。わたしは彼らを知っているし、彼らもわたしにはついて来ます。

28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えるのです。彼らは絶対に滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い取ることはできません。

29 父がわたしに下さった群れなのですから。父はだれよりも力があります。わたしの羊をさらうことなど、だれにもできません。

30 わたしと父とは一つです。」

ここに、イエス様と私たちの全能の天の父なる神様による私たちの守りのための、イエス様による偉大な約束をみます。 イエス様の羊には素晴らしい特権があります。 : イエス様の栄光の声を聞くこと、永遠のあるいは永遠に続く命、決して滅びることのない魂、そして天の父なる神様の御手に安全に抱かれていることです。

地上の父親にとって、家族を、特に子供たちを守ろうとする本能的な衝動があるのは自然なことです。 これは神様に似せて造られたことに由来します。 このことは、聖書の最初の書＜創世記 1 章 26 節＞に書かれています。

＜創世記 1 章 26 節＞

そして最後に、神はこう言われました。「さあ、人間を造ろう。地と空と海のあらゆる生き物を治めさせるために、われわれに最も近い、われわれのかたちに似せて人間を造ろう。」

私たちの罪深い性質でさえ、神様の似姿を完全に消し去ることはできません。 世界中のすべての文化は、自然を崇拝する部族的なものであっても、善悪の感覚を持っています。 すべての社会で最も一般的な権利は、家族単位を守ることです。 クリスチャンの父親たちは、天の父なる神様であられる創造主のようになるために、どれほど助け主である聖霊なる神様を引き寄せることができるでしょうか。 神様のような家庭は神様のような父親から生まれます！

＜ヨハネの福音書 10 章 29 節＞を読みます。

＜ヨハネの福音書 10 章 29 節＞

29 父がわたしに下さった群れなのですから。父はだれよりも力があります。わたしの羊をさらうことなど、だれにもできません。

私たちの天の父なる神様は、小さなスズメや私たちの頭髪を気にかけ、見抜いてくださるのと同じように、私たちの身体の健康を気にかけてくださいます。 ＜マタイの福音書 10 章 29 節-30 節＞でイエス様は私たちに教えられました。

＜マタイの福音書 10 章 29 節-30 節＞

29 たった一羽の雀でさえ、あなたがたの天の父の許しなしに地に落ちることはありません。

30 あなたがたの髪の毛さえ一本残らず数えられています。

しかし、イエス様を信じて新しく生まれ変わったクリスチャンは、天国でイエス様と共にいられる栄光の入口を目標としています。 クリスチャンへの天の父なる神様の肉体的なケアは明らかですが、私たちの霊的な安全は天の父なる神様の御手の中で永遠に続きます。 サタンはクリスチャンを神様から引き離そうとしますが、それはできません！サタンの策略は、クリスチャンに、自分たちは天の父なる神様の御手の中では安全ではないと思わせることです。 落胆の矢と嘘は、キリストと天の父なる神様へのクリスチャンの信頼を揺るがせるためのサタンの唯一の武器です。 しかし、イエス様はサタンの悪意の矢をすべて断ち切り、私たちのために十字架にか

かったださいました。それは完了しました！誰も、{サタンでさえも} クリスチャンを天の父なる神様の御手から奪うことはできません。
＜ヨハネの福音書 10 章 30 節＞の聖書箇所にかこう書かれています。

＜ヨハネの福音書 10 章 30 節＞
30 わたしと父とは一つです。」

それは ＜コリント人への手紙 I 8 章 6 節＞で教えられているように、私たちは御子イエス様を通して天の父なる神様のために生きていることを確かにします。

＜コリント人への手紙 I 8 章 6 節＞
しかし私たちは、父なる神ただおひとりであることを知っているのです。この神様が万物を創造し、人間をご自分のものとして造られたのです。また私たちは、ただ一人の主、イエス・キリストがおられることを知っています。この方がすべてのものを造り、私たちにいのちを与えてくださるのです。

与えてくださる天の父なる神様

ほとんどの現代社会では、家族のために両親が経済的な供給を支援するように割り当てられているかあるいは義務付けられていることが多いです。イエス様が地上におられた時代、ユダヤ人家族は主な養い主として自身の父に頼っていました。イスラエルは当時、私たちが呼んでいる農園または農村社会でした。現在でも多くの小規模農家がそうであるように、母親や子供たちが父親の負担を助けるためにできることはたくさんありました。子供たちが家畜の世話をするといった農場の雑用は、昔も今も一般的です。父親は畑を耕すかもしれませんが、家族は牛やヤギの乳を搾ったり、チーズを作ったり、野菜や果物を育てたり、衣服を作ったりして家族を養うことができます。イエス様が地上にいた時代、イスラエル人は不動産を購入することができました。しかし、ローマによる重税のために、多くの家庭は貧困に近い、貧困でした。そのため、農村の農家は、ローマに税金を納めるための資金として農産物を売るために、生存量以上の農産物を栽培することができなければなりませんでした。

すべての父親（あるいはアフリカの文化では叔父）は、大家族のために経済的に支援を与えることに尽力していますが、イエス様は神様を最優先することで、すべてのイエス様に従っている人々にチャレンジしています。＜マルコ 8 章 36 節＞で、パリサイ派の人々や使徒たちに衝撃を与えた次のような言葉をイエス様は述べました。

＜マルコ 8 章 36 節＞
たとえ全世界を自分のものにしても、いのちを失ったら、何の得があるでしょう。

＜マルコの福音書 10 章 23 節-27 節＞でイエス様がこう言われたとき、使徒たちはショックを受けました。

＜マルコの福音書 10 章 23 節-27 節＞

23 そのうしろ姿をじっと見ていたイエスは、弟子たちのほうをふり返り、「金持ちが神の国に入るのは、実にむずかしいことです」と言われました。

24 このことばに、弟子たちはびっくりしました。イエスは、もう一度言われました。「愛する子どもたちよ。財産を頼みとする人が神の国に入るのは、なんとむずかしいことでしょう。

25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが、よほどやさしいのです。

26 弟子たちはますます驚いて言いました。「そうだとしたら、この世の中で、いったいだれが救われるのでしょうか。」（金持ちこそ神から祝福された人だと考えられていたからです。）

27 イエスは弟子たちをじっと見つめ、「それは、神でなければできません。神には、どんなことでもできるのです」と言われました

私は悲しいことに、誠実なクリスチャンの父親が家族のために尽くすことを重視するあまり、子供たちがその優先順位を見て、神様優先より自分たち優先にしてしまうのを見てきました。子どもたちは、私たちが言うとおりにする以上に、私たちがするとおりにします！ これらの子供たちはクリスチャンの人生だと人々に見てもらえるようなことをしていましたので、すれすれ天国に入れるでしょう。もちろん、それを本当に判断できるのはイエス様だけです。しかし、私たちキリストにある父親は、家庭の経済的安定にかかわらず、子供たちがイエス様との親密な歩みに飢えかわくように訓練したいと願うべきです。私は、そのような目標や家族の優先順位をもっている聖職に召されていない多くの男性を知っています。

天の父なる神様の権威

＜ヨハネの福音書 10 章 31 節-33 節＞において、イエス様がユダヤ人たちとイエス様の正体について議論しなければならなかったことを再び読みます。

＜ヨハネの福音書 10 章 31 節-33 節＞

31 これを聞いたユダヤ人の指導者たちは、やにわに石をつかみました。イエスを打ち殺そうというのです。

32 「わたしは神のお心どおり、たくさんの良いわざを行って人々を助けただけです。そのどこが悪くて殺されなければならないのでしょうか。」

33 「なにも良い行いを責めているわけではない。神を汚したからだ。ただの人間のくせに、神だなどとぬかしおって！」

ユダヤ人たちが真の神様を冒涇したと非難する中、私は、非難するところがなくて罪のない御子イエス様への天の父なる神様の権威に改めて注目したいと思います。＜ヨハネの福音書 10 章 32 節＞でイエス様が言われました。

＜ヨハネの福音書 10 章 32 節＞

32 「わたしは神のお心どおり、たくさんの良いわざを行って人々を助けただけです。そのどこが悪くて殺されなければならないのでしょうか。」

天の父なる神様の権威はイエス様の「わたしは神のお心どおり」という言葉の中に宣言されています。地上の父親は神様に似せて造られたものであり、前にも言いましたように、私たちの罪がすべての人の中にある神様のイメージを完全に消し去ることはできません。だからほとんどの父親は、家族の中で権威を持つ責任を感じています。Brad Houdyshe1 は先週、困難な出来事に関する訓練についてメッセージをしました。聖書は、誘惑に打ち勝つために成熟するためには、この訓練を生み出すための困難な経験が必要だと言っています。彼は＜ヘブル人への手紙 12 章 7 節-12 節＞を引用しました。

＜ヘブル人への手紙 12 章 7 節-12 節＞

7 進んで神の訓練を受けなさい。神は、父親として当然のことを、子どものあなたがたにしておられるのです。父親から一度も懲らしめを受けたことのない子どもが、どこにいるのでしょうか。

8 神は、ほんとうの子どもだからこそ懲らしめるのです。もしそうでなければ、あなたがたは神の家族でないこととなります。

9 この世では父親が子どもを罰しても、子どもから尊敬されなくなるようなことはありません。だとしたら、私たちは真に生きることを学ぶために、喜んで神の訓練を受けるべきではないでしょうか。

10 肉親の父親は、ほんの短い間だけ、それも、限られた知識に基づいて私たちを訓練します。ところが神は、私たちの最善を願って、神のきよさを共有させようと訓練をしてくださるのです。

11 罰を受けた当初はだれも気持ちがよいはずはなく、むしろ傷つけられたと感じるものです。しかしあとになれば、それが自分の益となり、すべての面で良かったことがわかります。

12 ですから、しっかり立ち上がりなさい。

天の父なる神様からのこのようなクリスチャンへの訓練は、罪の行為とは何の関係もないことに注意してください。しかし、それは賢明な訓練からさらに自我に死んだものとなるために、クリスチャンの罪深い性質に対処するものです。

ルカはメシア・イエス様を信じるユダヤ人ではなかった唯一の新約聖書の著者でした。この異邦人医師の真実への渴望は、鐘のように大きく、はっきりと鳴り響きます。これは聖書のルカの福音書と使徒の働きに見られます。しかし、新約聖書の神学はユダヤ人たちによって確立されました。数千年にわたる神様の父性と権威を明確にし彼らに影響を与えました。神様は今も、律法の下にないクリスチャンを通して旧約聖書の価値観を輝かせたいと願っておられます。

私たちは、『聖書の時代の新しい作法と習慣』という本から、ユダヤ人の家族に関する文化的な情報から父親への神様の御心をより理解することができます。私たちの信仰の父であるアブラハムは、実は首長だったことに気づきます。その文化では、一家のリーダーは父親であり、一家の集団の長は首長でありました。彼は大勢の父親でありましたが、叔父、叔母、使用人といった大家族にとっては、指導者としての父親のような存在でありました。それゆえ、家族は父親が支配する「小さな王国」でした。

父親の権威に強い反抗心を持つ子供達は、神様の掟では石打ちの刑になるかもしれません。聖書はこのことを＜申命記 21 章 18 節-21 節＞で言っています。

＜申命記 21 章 18 節-21 節＞

18 いくら懲らしめても親の言うことを聞かない、強情で反抗的な息子は、

19 町の長老のところへ連れて行きなさい。

20 『息子は強情っ張りのうえに反抗的で、とても手に負えません。親の言うことなどそっちのけで、大酒ばかり飲んで、遊び暮らしています』と訴えるのです。

21 そのあと、町の者が息子に石を投げつけて殺します。二度と若者たちがそんな親不孝をしないように見せしめとするためです。

＜ガラテヤ人への手紙 3 章 13 節＞で神様が示されたように、イエス様は律法の呪いから私たちを解放するために来られました。

＜ガラテヤ人への手紙 3 章 13 節＞

しかし自分の悪い行いのために、私たちが受けなければならないはずののろいを、キリストはご自分の身に引き受け、私たちを律法ののろいから救い出してくださいました。聖書に、「木にかけられる者はだれでも、のろわれた者である」（申命 21・23）と書いてあるからです。

そして＜ヨハネの手紙Ⅱ 3 節＞の節：

父なる神とそのひとり子イエス・キリストが、恵みとあわれみと平安とを注いで、私たちを祝福してくださるのです。

しかし、しばらくの間イエス様に従い、聖書を学んできたクリスチャンは、反抗や不従順に関して、家族には敬虔な恐れが必要であることを悟っています。この恐れは、神様と、家族の長として任命されている父親へのものです。律法ではなく恵みの下にある私たちは、反抗的な子供達を石で打ち殺したりしません。今日でも神様は、私たちの反逆の罪に対して罰し、訓練することを必要とおられます。親愛なる O I C のお父様方、他の人が罪を犯す、また子供達が間違えている反抗に気づく知恵をイエス様に探し求めなければなりません。

＜ヘブル人への手紙 12 章 10 節＞を読みます。

＜ヘブル人への手紙 12 章 10 節＞

肉親の父親は、ほんの短い間だけ、それも、限られた知識に基づいて私たちを訓練します。ところが神は、私たちの最善を願って、神のきよさを共有させようと訓練をしてくださるのです。

天の父なる神様の大きな喜び

ブルース牧師は、敬虔な恐れや子供たちを石で打ち殺すことを説いていますが、神様の愛はどこにあるのですかとあなたは言うかもしれません。一瞬そう感じるかもしれませんが、神様があなたのためにその独り子を恥と苦しみ、血塗られた十字架にかけられたことを、ちょっと振り返ってみてください。イエス様は、私たちの日常の不安な思いを知っておられるように、愛する弟子たちの不安な思いを知っておられました。イエス様は、彼ら（また私たち）がイエス様を愛しているにもかかわらず、しばしば彼ら（また私たち）がイエス様の新しい教えに圧倒されることを知っておられました。＜ルカの福音書 12 章 32 節＞において、イエス様は賢明に彼らに言いました。

＜ルカの福音書 12 章 32 節＞

また、たとえ少数派でも恐れることはありません。神は喜んで、あなたがたを神の国に導いてくださるのです。

そして西暦 29 年、彼らはまた、「死を恐れてはいけません、食欲になっではいけません、今は心配するのを止めなさい」という多くの警告を、最近彼らに語られた、信頼できる良き師と格闘していました。

使徒パウロは＜ピリピ人への手紙 4 章 6 節-7 節＞で、すべてのクリスチャンのためにイエス様の気持ちを繰り返しています。

＜ピリピ人への手紙 4 章 6 節-7 節＞

6 何事も心配しないで、どんな時でも神に祈りなさい。そして、祈りに答えてくださる神に感謝しましょう。

7 そうすれば、人間の理解をはるかに超えた、すばらしい神の平安を経験します。キリスト・イエスにあって、その平安はあなたがたの心と意思を静め、安らかにしてくれるのです。

これらの聖句によって、私のメッセージを締めくくります。それは、私たちの完璧で、栄光に満ちた、宇宙で比べるものがない、天の父なる神様について完全には語れませんが、その偉大な神様についてのメッセージです。私の人生と聖書における神様の大きな喜びについて深く見つめてみると、いくつかの考えが浮かんできます。

1. 天の父なる神様がどれほどあなたを愛しておられるかを覚えていてください
2. 私たちは、私たちの周りの失われた世界にイエス様の憐れみを示すためにキリストのための兵士として訓練を学ぶ必要があります
3. この訓練は、＜ヘブル人への手紙 12 章 11 節-12 節＞で明らかにされています

＜ヘブル人への手紙 12 章 11 節-12 節＞

11 罰を受けた当初はだれも気持ちがよいはずはなく、むしろ傷つけられたと感じるものです。しかしあとになれば、それが自分の益となり、すべての面で良かったことがわかります。

12 ですから、しっかり立ち上がりなさい。

12 節は、霊的戦いにおいて、私たちの意志があまりにも弱く、罪に抵抗することも、私たちが霊的生活を正しくすることもまったくできないようなときに困難であるとわかります。このときこそ、神様の大きな喜びが最も力があるときです。＜ピリピ人への手紙 4 章 6 節-7 節＞のように、

6 何事も心配しないで、どんな時でも神に祈りなさい。そして、祈りに答えてくださる神に感謝しましょう。

7 そうすれば、人間の理解をはるかに超えた、すばらしい神の平安を経験します。キリスト・イエスにあって、その平安はあなたがたの心と思いを静め、安らかにしてくれるのです。

あなたが何を必要としているかを神様に言ってください！ 誘惑に抵抗する力を自分の中に見いだせないとき、悪魔があなたを絶望に導いてはいけません。自分自身を見るのをやめてください。祈ってください。聖書の中で最も短く、そして多分最も力強い祈りは、イエス様がご自分の愛する弟子たちに向かって水の上を歩かれた時です。＜マタイの福音書 14 章 25 節-33 節＞を読みます。

＜マタイの福音書 14 章 25 節-33 節＞

25 朝の四時ごろ、イエスが水の上を歩いて弟子たちのところに行かれると、

26 弟子たちは悲鳴をあげました。てっきり幽霊だと思ったのです。

27 しかし、すぐにイエスが、「わたしです。こわがらなくてよいのです」と声をおかけになったので、彼らはほっと胸をなでおろしました。

28 その時、ペテロが叫びました。「先生。もしほんとうにあなただったら、私に、水の上を歩いてここまで来いとおっしゃってください。」

29 “「いいでしょう。来なさい。」言われるままに、ペテロは舟べりをまたいで、水の上を歩き始めました。

30 ところが高波を見てこわくなり、沈みかけたので、大声で、「主よ。助けてください」と叫びました。

31 イエスはすぐに手を差し出してペテロを助け、「ああ、信仰の薄い人よ。なぜわたしを疑うのです」と言われました。

32 二人が舟に乗り込むと、すぐに風はやみました。

33 舟の中にいた者たちはみな、「あなたはほんとうに神の子です」と告白しました。

私たちが罪と誘惑の中に沈んでいるとき、サタンに滅ぼされるような気がして恐怖を感じるかもしれません。イエス様も天の父なる神様も、沈みゆくペテロのように、あなたに手を差し伸べてくださいます。＜マタイの福音書 14 章 30 節-31 節＞のようにあなたは言います。

30 ところが高波を見てこわくなり、沈みかけたので、大声で、「主よ。助けてください」と叫びました。

31 イエスはすぐに手を差し出してペテロを助け、「ああ、信仰の薄い人よ。なぜわたしを疑うのです」と言われました。

イエス様は、ペテロをつかまえようと手を差し伸ばした後まで、ペテロの「小さな信仰」を懲らしめたり、正したりしなかったことに注意してください！ もしかしたら今日、あなたはこの教会に迷い込んだかもしれません。理由はわかりませんが。天の父なる神様は、神様の家族の一員となるために、あなたをここに連れて来られました。このメッセージの冒頭で私はこう述べました。

＜ペテロの手紙Ⅰ 3 章 18 節＞

キリストも苦しみました。罪を犯したことのない方であつたにもかかわらず、私たち罪人のために死なれたのです。それは、肉においては死んでも、霊においては生かされて、私たちを神のもとに導くためでした。

つまり、イエス様はすべての不義、不正な人のため、それはこれまで生きてきたすべての人のために死なれたのです。イエス様を信じると決めたそのような人は、天の父なる神様の安全な愛の手の中に置かれます。このことを思ったり聞いたりする中で、自分の中に何か新しいものを感じられたなら、このメッセージの後にあるリフト・サインに行き、祈りを求めてください！

4. 長年キリストにあって成熟してきた者であれ、イエス様を信じて新しく生まれ変わってまもない者であれ、神様の子として、私たちは「父よ」と正式に祈るように導かれるていと感じるかもしれないことを覚えていてください。しかし、私たちの天の父なる神様は、＜ガラテヤ人への手紙 4 章 6 節＞のように私たちが、正式にではなく、親しくお父さんと祈るとき、最も喜ばれると私は信じています。

＜ガラテヤ人への手紙 4 章 6 節＞

このように神様は、私たちの心に、神の子の御霊を送ってくださいました。それで今、私たちは神の子どもとして、神を「お父さん」とお呼びできるのです。

祈りましょう、